

うな痛撃を與へる偶然なるものも、その結果から見ると我々の利を計り、又は間接に非常な助けをばしてくる場合がないでもない。云ふ事に過ぎない。要するに我々の常として、偶然の残酷な悪戯と怨んでゐた事が自分の利となり幸ひとなつた場合には、偶然の中に先見の明があつたのだと思ふが、それが特にさう感じられるのは、斯様な偶然が、我々の見込に反して、或は又我々自身の避けやうとした行き道を通じて案外にも我々を幸福な到達點に導いて行つた場合である。我々は此んな場合に *tunc bene navigavi, cum naufragium feci* (難船もしつ、されどまた好き船旅なりき) と云ひ、選びと導き(豫定と過程)との相違を如何にもはつきりと認め、導きの酷さをも當然の事として思ひ返へす。そこで又我々は、何かの不仕合せや逆運に出會つても、『先行き何んな好い事になるか知れない』と云つて慰めるが、此の普通によく繰返へされてゐる言葉は、偶然が世界を支配してゐるとは云ふものゝ、一方には迷ひ(主觀的には我々自身の迷ひ)といふ別の支配者が居て我々は双方の平等な威力の下に置かれてゐるから、我

々が今(自分の迷ひから)不幸と見てゐる事も、恐らくは一つの幸ひであるやも知れないと云ふ諦認から言ひ出されたものである。つまり世界の一方の虐王に撃ちこらされると他方の虐王に逃れ、偶然への怨訴を迷ひに控訴するのが我々の常である。

然るに此の見地から離れてみると、單なる、純粹の、明白な偶然に一つの目論見を認めるのは無鐵砲に等しい考へ方であるとも云へやう。然し私は、凡ての人が、少くとも一生に一度は、如何にも鮮明にかうした考へ方をするに違ひないと信ずる。又、此の考へ方は世界中のあらゆる民族の間で、あらゆる宗教上の教へと並立して行はれ、殊にはマホメット教國に於て甚しかつた。又此の思想は、それをどう解するかに随つて、極めて不條理なものとも見えれば極めて深遠なものとも見えて来る。それから、この思想の證明として擧げられる色々の實例に對しては、假令それ等がどれほど著しいものであつても、一般的に次のやうな有力の反對が加へられてゐる。即ち偶然が我々の案件に對して、我々自身の知性や洞察と同じ程度に、又はそれ以上に都合好く

配慮してくれることがあり得るとしても、それは當然過ぎるほどの紛れ當りで、その爲めに、我々の一生涯が我々以外のもの、豫定と先見とに導かれると云ふほどの事は信じられないと云ふのである。

凡ての起つて来る事が、一つの除外例もなしに、嚴密な必然性を以て現れると云ふことは、一つの先天的に認められる真理、随つて又説破することの出来ない真理で、私はこゝでそれを論證され得る宿命觀と呼んでおかう。この真理は、曩に出した『意志の自由について』の論文(六二頁、二版六〇頁)の中で、その前のあらゆる考察の總結果として與へてある。又、此の眞理を経験的後天的に證據立てゝゐるのは、離魂病者や透覺力を有する人々、(時には又普通の人の夢)が、未來の出來事を精確に豫告すると云ふ疑ふ事の出來ない事實である。即ちその最も顯著な實證である透覺(千里眼)について見ると、それに依つて永い以前に豫告された事が、後になつて、その凡ゆる附帶事項と共に、全然的確に實現することが屢々で、而も我々傍の人が故意に、又あら

ゆる方法を講じて豫告をしくじらせやうとし、又は少くとも附帶事項の何れかに於て豫告に反したものにしやうと力めた場合にすら、丁度豫告された通りの事が實現して我々の邪魔立ては徒爾に終り、恰も豫言された事の實現を遮り破ると見込んだ事そのものが却つてそれを誘致したやうに見えるが、此の間の消息は、丁度古代の悲劇や歴史の中で、神託や占に依つて公表された不祥事が、丁度それに對する豫防策を順路にして實現するのと同様である。此の種の史譚や戯曲は澤山にあるが、こゝでは只、ソッフオクレスの『エーヂプス王』と、ヘーロドットの第一卷にあるクレゾスとアドラストとの美しい物語(三五——三六章)とだけを挙げておく。又、此等に照應した透覺上の實例は、決して虚構の報告などをする氣遣ひのないベンデ・ベントセン(Bende Bendsen)が、キーゼル編の動物磁氣誌八編の第三卷に出してゐるし、ユンク・シチルリンクの精靈學理論一五五節にもその一例が掲げてある。只この透覺といふ能力は極めて少數の人にしか與へられてゐないが、若しそれが多數の人々にも與へられて

みたなら、無数の出来事が豫報されて着々と精確に實現し、そこで何人もが、一切の起つて来る事は嚴密な必然性を以て現れると云ふ事の否み難い實證を認め得ること、思ふ。してさうなると、事件の進行がどれほど偶然的に見えても根本に於てはさうでなく、むしろ凡ての偶然そのもの *tu casu deponitur* (計畫なしに現れて出たもの) も、一つの隱微な必然性 *causabunda* (定運) に包まれて居り、偶然はその單なる道具に過ぎないと云ふ事が分つて、此の點については何人も疑ひを有つ事が出来なくなるであらう、昔しから色々の形ちを以て行はれた占ひの術も、此の必然の理法を瞥見的に讀み取らうとした試みである。して又、此のやうな占筮法が實地に行はれてゐると云ふ事からは、凡ての出来事が完全の必然性を以て現はれると云ふ事だけでなく、此等の出来事は、その實現する以前から、豫め何等かの具合で定まつて居り、又客觀的に豫めされ得ると云ふ事が結論される。即ち占斷の能力を有つた人の眼には、それが最早現在^の出来事として映るのであるが、此の間の消息は、その實現が因果關係の進みに基い

た單なる必然性のものであると云ふ事に歸せしめることが出来る。しかし兎も角も、あらゆる出来事のかうした必然性が決して盲目的のものでないと云ふ見解と、随つて又、我々の生涯にも必然的であると同程度に計畫的な進み方があると云ふ信仰とは一種の高等な宿命觀で、此れは單純な宿命說と違つて論證こそされ得ないが、恐らくは何人の中でも早晩に一度は必らず現はれて出るもの、随つて凡ての人は各自の思考の爲方に準じて、一時的にか永久的にか、何れにしてもそれを信じきるやうになる。そこで我々は、普通の論證され得る宿命說と區別するために、それへ超絶的宿命觀 (*transcendent Fatalismus*) といふ名稱を與へることが出来る。此の宿命觀は、前者と違つて單なる理論的の認識から出て來るのでもなければ、斯様な認識を得る爲めに要せられる推理的考察から出て來るのでもなく、(此等の考察に堪へ得るのは少數者だけである)、何人もが自分自身の生涯に於て經驗した事から次第／＼に考へ出されるものである。即ち此等の經驗の中には我々に深い省察を促がすやうな出来事があつて、それ等

は我々に對して如何にも著るしい有目的の現れ方をするから、一方では全くの外面的な偶然性を帯びてゐると共に、他方では明白に道德的又は内面的の必然性といふ極印を帯びてゐる事が認められる。そこで此の様な出來事が度々に現れてゐると、我々の中には、「各個人の生涯はどんな散りぐ」とし錯雜したものと見えやうとも、そこにはそれ自らで調和のとれた豫定的の傾向と教訓的な意義を含んだ一つの全體があつて、恰も一貫した構想の餘になつた史詩の如きものである」と云ふことが考へられ、此の考へ方は永久的の確信とまでになることが屢々である。又、今云つた教訓的意義(此の種の宿命觀が生存意志の棄却に導くこと、後に詳出)は、我々の中の個體的意志に關係した方面へ働きかける。それと云ふのが、我々の個體的な迷ひと云ふものは、結局のところ此の意志の働き方に過ぎないからである。そこで又、計畫と全體との現れてゐるのは、哲學教授等の(歴史哲學に於て)妄想してゐる如く世界の歴史に於てははなく、一々の個人の生涯に於てある。實際、民族なるものは抽象的にのみ存在し、實在するのは個々

人のみである。それ故、世界の歴史には直接の形而上的意義があるのでなく、それは本當を云ふと一つの偶然に形成されたものであるが、此の點については「意志及び心識としての世界」第一卷三五章に述べておいた事を参照してもらはう。——かう云ふ譯であるから、多くの人の中には、自分自身の個人的運命に關して先に云つたやうな超絶的宿命觀を生ずるのが常で、何人でも自分の生涯が可成りの長さにまで展開した後で、その始終を注意深い反省を與へてみると、恐らくは一度だけでも此のやうな宿命觀を有たされるに違ひない。して、その中には多くの慰めが含まつてゐるのみでなく、また多分の眞理が含まつてゐるから、何んな時代でも、それは一つの教理として言ひ表はされてゐた。こゝでは、全然私見の混つてゐないものとして、一人の多事多方面な生涯を送つた老人の證言を引いておかうが、それは九十歳の齡に達したクネーベル(*獨逸の著述家、ゲアキマールのコンスタンチン侯の師傳、ゲータの友人、一七四四—一八三四)が手紙の中に述べてゐる言葉である。「仔細に觀察してみると、我々にはかう云ふ事が認

められる。即ち、多くの人の生涯には或る一つの計畫があつて、此の計畫は彼自身の天性か又は彼等を導いて行く事情かを通じて、恰も前以て彼等の爲めに決定されてゐたかの如くに思はれる。彼等の生涯には千變萬化の状態が出て来るが、しかし最後には一つの全體が浮き上つて見え、その中には或る種の調和が出来上つてゐる。……或る定まつた運命の手は、假令それが何れほど潜み隠れて働かうとも、遂にははつきりと認められて来る。此の手は外部からの影響や内面での情動を通じて動かされ、それがどんな方面を指示するかは、互ひに矛盾しあつてゐる理由の總結果として生ずることとも屢々である。要するに一生涯の進行がどれほど錯雜してゐやうとも、そこには必らず根據と傾向との一貫してゐるのが見出せる。』(クネーベルの *Litterarischer Na-chlass* 二版、一八四〇年、三卷、四五二頁)。

*1 一八五二年十二月二日の「タイムス」には次のやうな裁判上の口述が載つてゐる。即ちグロウスマンヤキア州のニウエントで、屍驗官のローグクローツ氏に依つて、マアク・レネルなる者の溺死體についての驗言

が行はれた時に、溺死者の兄弟が下の如くに申立てた。「私は兄弟のマアクが行衛不明になつたと云ふ最初の知らせに接すると、直ぐに傍の人へかう云つたのでした。すると彼は溺死したのです。なぜと云つて、私は昨晚彼が溺れて死ぬ夢を見たと、私も水の中につかつてゐて、どうかして彼を助けたいと力めたのです。それから愈々以て行方が分らないと云ふ二度目の報知を受取ると、續いて二度目の夢を見ましたが、それに據ると、兄弟はオックスンホルの水關の近くに溺死してゐて、その側を一匹の岩魚が泳いでゐました。ところが何うでせう、翌朝になつて最一人の兄弟と一緒にオックスンホルの水關のところへ行つてみると、そこには岩魚が泳いでゐたので、私は兄弟がツッキリ、いらに溺れてゐるのだと思つて押してみると、案の如く屍體が見つかりました」云々。——此れでみると、一匹の岩魚がそこを泳いでゐる、而も時もあらうに丁度屍體を押しに行つたその秒時に泳いでゐると云ふ、そんな間一變的な事柄までが豫知されてゐたのである。

*2 自分の過去に出て来た澤山の場面を精密に回想してみると、恰も始めから終りまでチヤンと筋の通つた小説の如くに、凡てが構想的に工まれてゐるやうに見えて来る。

*3 眞實に我々の行に(所業)として見るべきは、我々の行爲でもなければ生涯でもなく、——かう云ふと何人も案外の感に打たれやうが、——それは實に我々の本性と存在である。即ち我々の行爲と生涯とは、この本性と存在と嚴密な因果關係を通じて現はれる事情と外界の出來事とを基礎にして、全然必然的に出て來るのである。それ故一人の人間が生れると、その時にはもはや、彼の全生涯は一々の成行きに至るまでを不

可變に決定されてゐるのである。さればこそ夢遊病者が最高度の能力に達した場合には、精確にそれを豫言し得るのである。だから、我々の生涯や行爲や悩みやについて考察し判断しやうとする時には、この確實な大きな眞理を眼中においてゐることが必要である。

かうして、一々の個人の生涯が計畫的に進んで行く、と云ふことは、その一部分の理由として、生得の性格が不可變性を有つてゐる事と、随つてその自己發表には嚴密な一貫的合致がある事からも説明される。即ち一々の個人は、自分の性格にとつて最も適應した事を直接に精確に認識するから、そこで彼等は、よしそれを明白な考慮的意識に取り入れる事はないにしても、直接に本能的に、それを準則として行動するのが常である。此の種の認識は、それが明白には意識されないで直ぐと行爲に移つて出ると云ふ點から見ると、マアシヤル・ハル(*英國の生理學者「延髄と脊髄との反射運動について」)「神經系統論集」などの著、一七九〇—一八五七)の云つた反射運動(reflex motions)に對比せしむべきものである。即ち一々の人間は、外側からも、又は(自分自身の間違つた概念や先

入觀に拘束されない限りは)、自分で何ういふ譯とも理解することなしに、内側からも此の認識に準つて個人としての自分に適應した事を追求するが、それは一度、砂の中にあつて太陽の熱に解へされ、やつと卵の中(たまご)から這ひ出したばかりの龜が、まだ(眼が)あいてゐないから)水を見る事すら出来ないのに、直ぐと水のある方角へ這つて行くのと同様である。それ故此の認識に導かれて行くと云ふ事は、一々の人間が依つて以て自分に適應した道を直進し得る内面の羅針盤、秘密の牽引力で、この道が一定の方向に脈々と打續いてゐる事は、只それを歩み終えた後でのみ氣付かれる。——しかし、この認識の衝動は外部の事情が與へる強大な影響や威力に比べると如何にも不十分なものに見えもするが、それにしても、世界のなかでの最も重大な事象である人間の生涯、あれ程の澤山な行爲と悩みと苦しみとで購はれる各個人の生涯が、その半面、即ち外側から導かれる半面では、決定的に全然、それ自らとしては何物をも見ることがなく、又少しも整序といふ事を知らない全くの盲目な偶然の手に置かれてゐると云ふ事も容

易には信じ難い。むしろ此の點については次の如くに信すべきだと思ふ。即ち、肖像畫の一種に歪像メタモルホーズ（フランスの物理學者）Ponillet. 二卷、一七二）と稱せられてゐるのがあつて、此れは肉眼でみると歪ゆがみくねつた變なものに見えるが、圓錐鏡でみると正しい人間の顔になつて見える。——ところで、世界の進行を純粹に經驗的に會得するのはこの歪像を肉眼でみるのと似て居り、反對に運命の意圖をたどつてみるのはそれを圓錐鏡で眺めるやうなもので、この鏡は、そこへ散りぐに描かれてゐる線や影を整へ結び合すのである。然し又、此の運命觀に對しては、その反對説としていつでも次のやうな見解を持ち出すことが出来る。即ち、我々が自分の生涯の出來事に計畫的の聯絡を認め得たと信するのは、我々の空想力が物事へ秩序や様式を與へたがる事から來た無意識の結果で、それは丁度、壁についてゐる汚染を見て、そこには明白に又見事に人顔や人の群ぐんが描き出されてゐると見、最も盲目的な偶然の撒き散らした班點はんてんの中から、一つの意匠的な聯絡を見てとる場合に似てゐる、とかう云ふのである。然しそれにし

も、最も高遠な、又最も眞實な語義に於て、我々にとつての正しいもの補益となるものは、決して單に企て計られただけで遂行されることのないものである筈はなく、故に又、我々の思考の中でのみ存してその他の存在を有しないもの、——（西班牙の詩人）アリオストの云つた *vani disegni che non han' mai loco*（單に企てられただけで實現しなかつたもの）、偶然のために實現を妨げられ後々までも無念に思はれてならぬやうなものである筈はなく、むしろ實在の大きな繪面の中へ現實的に太い線で描き出されたもの、我々がその計畫的な聯絡を認めて、後になつて確信を以て *sic erat in* *esse*（それは運命のままに斯くありき）と云ひ得るものでなくてはならない。それ故、この意味に於ける計畫的のものが實現する爲には、何等かの具合で、事物の最も奥深いところに潜んでゐる偶然性と必然性との合致に助けられると云ふ事が必要だと考へられる。そこで人間の生涯についてみると、本能的衝動として自らを表はしてゐる内面的必然性と、理性の働きに係る考慮と、外側から働いて來る境遇や事情やの影響と

が交互に働き合つて、その結果、この生涯が最後に達した時には、それが一つの十分に下彩色された完い美術品と見えて来るべき筈で、只凡ての起案されたばかりの美術品と同じく、この生涯が終りになる前に眺めると、それはまだ形成中にあるのであるから、計畫も目的も認められないことが屢々である。然し、何人にもせよ、生涯の終りになつて精密に後を振り返つてみると、その全體が最も熟考的な先見、智慧、一貫的固執の作り出したものであると云ふ風に考へずには居れなくならう。して、此の（生涯といふ）作物が全體として何れほどの程度に重大であるかは、斯様な生涯の主體である個人が尋常人であるか非凡の人物であるかに隨つて定まる。そこで此の見地からすると、この偶然を支配者にしてゐる現象の世界（mundus pha nomnon）の根底には、到る處で偶然そのものを支配してゐる本有の世界（mundus intelligibilis）があるのだと云ふ極めて超絶的な思想が出て来る。——なるほど自然は一切の事を種族のためのみ爲し、個體のみの爲にと云つては何事をも爲さないし、自然にとつては種族が一切

で個體は有つて無きに等しいものであるが、然し、我々が今云つたやうな思想の中に假定してゐる根元的の力は自然と別物であつて、むしろ自然の彼方に存する形而上的の力である。さうして此の力は、凡ての個體の中で全いそれ自らとして存在するから、此の力にとつては個體が一切である。

それについても本當を云ふと、此の點に關して明らな會得をしやうとするには、先づ次の疑問に答へてかかるのが至當の順序であらう。——「人間の性格と運命との間には全然的の不權衡があり得るだらうか？——それとも、一々の運命は、主要の點に於て一々の性格に適應してゐるのだらうか？——或は又、實際には一つの秘密な不可思議の必然性があつて、恰も詩人が戯曲の構想をする如くに、いつでも此の二つを適應せしめるやうに働いてゐるのだらうか？——然し、我々の知能を以てしては、到底此の疑問に對してはつきりした解釋を得ることが出来ない。

我々は何んな時にでも、自分の行爲に對しては自分が主人公（直接の實行者）である

信じてゐるが、然し我々の過去の生涯を振り返つて見ると、——殊にその中の不幸な失敗やその結果に眼をとめてみると、我々には屢々、自分が何うしてあんな事を爲たのか何故あの事を爲ないでおいたのかと訝られて、恰もそこには一つの自分以外の力が我々のやり方を導いてゐたらしく思はれて来る。そこでシェキクスピアも言つてゐる。

Fate, show thy force; ourselves we do not owe;

What is deed must be, and be tihh so!

(運命よ、思ふがまゝに汝の力を現はせ、我等は我等自らのものならず、汝の定めたる事は必らず起り來らん、此の事も亦さなり！)

「主顯祭の夜」 一幕 三場

ゲーテも、『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(五幕)の中にかう言つてゐる。「我々人間は自分で自分を導いてゐるのではない。我々を支配すべき力は悪靈に與へられてゐる。そこで彼等は勝手氣儘に我々を虐げ苦める。」また『エグモント』(五幕)でも、

「人間は自分で自分の生涯を導き、自分自身を指揮して行くと信じてゐるが、而も彼等の中の最も内面的な自分は、何等の抵抗をも爲し得ないで自らの運命に引つぱられて行く。」否、豫言者のエレミヤですらかう言つてゐる。「人間の爲す事は彼自身の力に由るにあらず、彼が如何に行ひ如何に進むかは何人の力にも支配さるゝことなし」(一〇、二三)。此れと對讀すべきはヘロドタスの一卷九一章、九卷十六章、又ルーキアーノス(*ギリシヤの著述家、二世紀)の『死人の會話』十九段と三〇段である。一體で古人は韻文なり散文なりに於て、運命の全能的威力を力説し、それに對して人間は如何に弱いものであるかを指示して倦むことがなかつた。彼等の書いたものを見ると、そこには到る處で、彼等が此の確信に充たされてゐて、事物には明白な經驗的聯絡以外に、それよりも一層深い祕密の聯絡があると認めてゐた事が分る。それ故、ギリシヤ語のなかには此の概念を表はした言葉が澤山あつて、*fortior* (人間に降りかゝつて來る事、運、死)、*aiōra* (運命の女神、不祥な神命)、*anagnōsis* (定運)、*katopnein* (命數)、*tyche*

(運命の女神)、*Atropos* (報復の神ネメシスの別名、逃れられない事)、その外にもまだあらう。反對に *Propona* (豫め感知すること、先見、神々の攝理) といふ辭は *Moira* (理性) といふ二次的のものから出發し、随つて平明で解り易くはあるが、それと共に淺薄で虚妄で、運命といふ(理性の理會を超越した)もの、概念を取り逃してゐる。——兎に角、古人の此のやうな見解は、我々の行爲が二つの因子から來る必然の結果で、その一つは我々の性格、他は動機であると云ふ點に基いてゐて、性格の方は不可變に確定したものであるが、只後天的にのみ、故に又漸を追ふて我々に自認され、動機の方は外側にあつて、世界の進行につれて必然に持ち來たされ、機械的必然と同様の必然さを以て、我々の生れながらの性格に(それが確立した性状のものであると云ふ條件の下で)影響を及ぼす。然るに、此の結果として生ずる行爲の流れを觀察し判断する『我れ』なるものは『認識の主體』で、斯様なものとしては性格とも動機とも無縁故であり、單にそれ等の働きの結果に對する批評的傍觀者たるに過ぎない。

然るに、若し我々が先に云つた超絶的宿命觀 (transcendenter Fatalismus) の見地に於て、そこから一個人の生涯を觀察してみると、一方ではその中の出來事が明白な物理的の偶然性を帯びて居り、他方では道德的形而上の必然性を帯びてゐるのを見て、時にはどんな演劇にも見られないほどの感興に打たれる事があらう。尤もこの後の方の必然性は決して論證され得るものでなく、むしろ何時でも只想像的に感知されるだけである。そこで此の事を、一つの一般に熟知されてゐる實例(それは同時に又、その如何にも顯著である事の爲めに、此の間の模範的消息としても見られる)に依つて明瞭に認めたいと思ふ者は、シルレルの(詩篇)“Gang nach dem Eisenhammer” (鐵工所までの遊歩)を讀むがよい。即ちそこに出てゐるフリドリオンが、彌撒の禮拜を勤める事に依つて氣後れを生ずるのは、一方からみると全くの偶然な事であるが、他方からみると彼にとつて此上もなく大切な事、又必然な事であつたのである。恐らく何人も、自分の生涯を適當に省察してみると、その中から、よし此れほど重要でなく又

明白にでなくとも、幾つかの類似の場合があつた事を見出し得るであらう。そこで殆んど大多数の人々は、斯様な觀察の結果として次のやうな信じ方をしたくならう。即ち我々の生涯は、一つの祕密な不可解な力に依つて凡ての迂餘曲折を導かれて居り、此の導きは我々自身のその時々^{とき}の意圖と逆行してゐることも屢々であるが、その實はこの生涯の客觀的全體性と主觀的意匠とに順應し、隨つて我々の眞實の（形而上の意味に於ける）利益を資けてゐたのであり、我々は後になつて初めて、自分が反對の行き方をしやうとした事の愚かしさを悟る。Dunt voluntem fata, nolentem trahunt、（運命の導きは好意に出づれど、その導き方は手荒し。セネカ、書東、一〇七）^{*1}然るに斯様な力は一つの見えない糸で凡ての事物を集め繰つると共に、因果關係が何等の聯絡、しに引き離してゐるものをも結び合せるものであり、その爲めに此等のものは所要の時機に於て合致した現れ方をすると思なければならぬ。そこで斯様な力は、恰も詩人が自作の戯曲を支配してゐる如く、現實に出て來る一生涯の出來事を支配してゐるの

で、偶然と迷ひとは、主として又直接に事物の因果的法則的な進行を破るために出て來るものであるから、此の力の見えない手に使はれてゐる道具たるに過ぎない。

*1 別本、運命は從順なる者を導き、不從順なる者を引き摺り行く。

此の力は、事物の最深處に潜んでゐる偶然性と必然性との合致から生じ、隨つて理論的には測り知られないものであるが、何事よりも勝つて、我々をして大膽に斯様な力の存在を假定せしめるのは次の見解である。即ち一々の人間の一定した特有の個性は、身體的・道德的・知力的の方面からみると彼にとつての一切中の一切であり、隨つて（この個性は）最高の形而上的必要から生じたものでなくてはならぬが、他の方面から觀察すると、（私の主著、第二卷四三頁に詳説しておいた如く）、父親の道德的性格と母親の知性的能力と、兩者の合體的體制とから來た結果であり、而も兩親が父母として交つたと云ふ事は、殆んどいつでも明白に偶然的な事情から來たのである。そこでかう觀て來ると、我々には何うしても、偶然性と必然性との究極的合致といふ形而上的乃

至道徳的假定を承認せずには居れなくなる。但し私の見る所に據ると、この必然性と偶然性との統一物である根本力について明白な概念を得ることは不可能で、只、この根本力は同時に又古人が運命 (*επιταρη νη, ητιμοινη, fatum*) と呼んでゐたもの、彼等が一々の個人の導きの精霊と見てゐたもの、或は又クリスト教徒が神の攝理 (*Προνοια*) として崇めてゐたものであると云ふ事だけが言ひ得られる。序でに此の三つの相違を云ふと、運命は盲目的なものと見られ、他の二つは人格的に先見的のものと見られてゐるが、然し此の相違は、我々が事物の深遠な形而上的本性に考へを及ぼして、今云つた偶然性と必然性との不思議な統一、あらゆる人事の祕密な指導者たる統一も、此の本性の中にのみ求めらるべきであると云ふ點にまで達すると、もはや何等の跡形もないに消え失せてしまう。

一々の個人には一つの精霊 (*Genius*) が付添ふてゐて、この精霊が彼の身の上を護り、彼の全生涯を導いて行くといふ考へはエトルリア人 (*アリアン人種で小亞細から移住し

た古代伊太利人の一族) に始まつたものであるが、古代の民族間には一般的に傳播してゐた。この信仰の要點はメナンドロス (*ギリシヤの喜劇詩人、前三四二—二九二) の詩句に含まれてゐて、それはブルータルコス (*Detong, an.*) (心の安靜について) 十五章、又シトベーウスの『古文選集』一卷六章四節、アレクサンドリアのクレメンスの『シトロローマ』五卷一四章) によつて傳へられてゐる。

Arxun di Lew, avdop ouyKxqjoraxel

Evduq yevonenuo vjvrvrvvje tov Biv

Arxho:

(人一人の生るゝと同時に、その生涯を護り導く善き精霊も星となりて定まり生まる)

プラートーもその『理想國』の終りの方で、一々の靈魂は、その復生に先つて、一つの無生命な、而もそれ自らに適應した人格を具へたもの (護りの精霊) を選ぶと説いて居り、此の章句についてはボルフキーリウス (*アレキサンドリア派の哲學者、三世紀) が最も精讀に値ひする註釋を書いてゐるが、それはシトベーウスの『古文選集』二卷八章三

七節に保存されてゐる。又アブレューヌス(*ラテンの著述家、二世紀)の『ゾークラテスの奉じてゐた神靈について』(二三六、二三八頁、ビーボント版)には此の精靈デーニウスに関する要の記述があり、イアムブリコス(*ギリシヤの小説家、二世紀)の『埃及の密教について』九篇六章、『個々人の精靈について』にも、それについての簡略ではあるが必讀に値ひする説明がある。しかし、此の思想を最も深遠に説いたのはテオフラストス・バラツェルズ(*瑞西の醫學者、鍊金學者、一四九三—一五四二)で、彼はかう云つてゐる。『運命なるものを正しく認め様とするには、一々の人間には一つの精靈が與へられてゐて、それは彼以外に住み、天上の星の中に座を占めてゐると考へるがよい。人間に前兆 (Praesigia) を豫示したり、又は後になつてそれに氣付かせるのも此の精靈で、此等の前兆は人間のゐなくなつた後にも殘存する。運命とはこの精靈のことである。テオフラストス全集、シトラスブルヒ、一六〇三年、二ツ折版、二卷三六頁)。又此の思想がブルータルコスにすら見えてゐるのは注目すべき事で、彼は次の如くに言つてゐる。『靈魂には

二つの部分があつて、第一の部分は地上生活をしてゐる身體の中に潜没してゐるが、第二の一層純淨な部分は身體以外に存し、一つの星となつて人間の頭上に飄蕩してゐる。此の部分が精靈とか導きの神とか呼ばれてゐるのは至當の事で、人間はそれに導かれ行くのであるから、賢者は柔順にその指導に隨はうとする。この全文は“De genis Socratis”一二章に出てゐるが、餘りに永いからこゝへは引用しやれない。又序でに云つておくが、基督教は何人も知つてゐる如く、あらゆる異教國の神々や精靈を無造作に悪魔といふ部類へ投げ込んでしまつたが、古代人の普ねく信じてゐたこの守護神デーニウスだけはさうもしかねて、それを學者や魔法使ひに專屬してゐる Spiritus familiaris (使魔)と云ふ事に仕立て直したやうである。——又、基督教の説いてゐる攝理といふ事は餘りによく知れ渡つてゐるから、こゝではその説明に筆を費す必要はなからう。——兎に角、此等は何れも皆、私が今説き明かさうとしてゐる事の單なる形容的寓話的解釋であるが、一體で此の種の最も深い最も隱微な眞理は、只形容や比喻を通

じて會得するより外仕方のないものである。

しかし眞實を云ふと、先に云つた隠れ働いてゐる力、外面的の影響すらをも指揮してゐるらしい運命の力も、結局はやはり只、我々自身の中の神秘的な最奥部に根ざしてゐると見られる。なせなら、一切の存在のアルファとオメガとは、結局のところ我々自身の中に宿つてゐるからである。然しながら、此の力が自體に於て何んなものであるかと云ふ事は勿論、それが何ういふ具合にして有り得るか、と云ふ事の表面上の解釋ですら、どんなに都合よく行つた場合にも、只類似や比喻を通じてのみ或る程度までを限つて爲され、ずつと遙かに隔りを置いて臆測すると云ふ事以上には出ることが出来ない。

そこで、かうした力が働き支配してゐることの最も手近かな類似は、自然に現れてゐる意匠的外觀である。即ち自然界を観ると、そこには有目的と思はれる意匠が目的の認識なしに現はれてゐるが、殊にそれが著るしく認められるのは、斯うした目的に

適つたやうな意匠が表面にはつきりと出てゐる場合、即ちそれが、色々の、否類を異にした生物の間に現はれ、或は又無機物の間にすら現はれる場合である。又、此の種の實例の目星しいものを挙げると、樹木のない極地へは海から澤山に流木が漂ふて來ることや、この地球の大陸が北極の方へ偏つてゐて、その冬は天文學上の理由からして南極よりかも八日ほど短かく、随つて一層凌ぎよくなつてゐる事などである。然しその外にも、生物の包まれきつた有機體の中には見紛ふことの出來ない内實の目的性がある事、自然の技巧とその單なる機械制とが、斯様な目的性を媒助する爲めに驚くべき一致をして働いてゐる事、Nexus finalis (積極聯絡)とNexus effectives (手段聯絡)との一致してゐる事(此等については主著の二卷二六章三三四—三三九頁〔三版、三七九—三八七頁〕を讀てもらひたい)は、我々をして類推的に、色々の點、否非常に相遠ざかつてゐる點々から出て來て、一見すると相互に何の緣故もない様な事柄が如何に協同一致して最後の究極目的に仕へてゐるかを認めしめ、認識には指導されな

いで、認識のあらゆる可能に先つた一層高い種類の必然に支配されて、丁度その究極目的に於てピッタリと相合致するのを認めしめる。——尙又、我々の太陽系統がどうして生じたかについてのカントやラブラッスの學説は如何にも真に近いものと思はれるが、一方では此等の學説を鮮明に思ひ浮べてみると共に、一方では又、私が主著の二卷二六章三二四頁(三版、三六八頁)に述べておいた事、即ち自然力なるものは自らの不可變的な法則に随つて働く盲目のものであるが、而も最後には此のやうな整然とした驚異すべき遊星系統を作り出してゐると云ふ事を熟慮してみたならば、此れ等の事實から類推して、一般的に又間接に、個人々々の生涯もやはり、屢々盲目な偶然の氣紛れな悪戯としか見られないやうな出来事から成立つてゐるにも拘らず、その實は恰も計畫に則つたものゝ如くに導かれて居り、個人の眞實の最終の利益を成せしめるやうに進んで行くのだと云ふ事が認められて來やう。そこで此の見地からみると、豫定的先見(攝理)といふ教理は、絶對力の人格的解釋であるから直接に *sunsu proprio* (そ

のまゝの意味では)承認され得ないが、而も一つの眞理、間接に譬喩的神話的に言ひ表はしたものであるから、凡ての宗教的神話と同じく、實踐生活の助け、主觀的の慰めとして十分の價值を有するものである。又此れと同じ意味に於て、カントの道徳的神學も、實際には寓話的のものとして、即ち實踐生活を指導する圖式として見るのが本當である。——それ故約言すると、此の教理は眞實でなく、而も又眞實であるのと同等に役立つものだと云つてよい。此の廣大な遊星系統は、黑白も分らないやうな盲目な自然力から作り出されたのであるが、此れ等の原始的な力の中にはもはや生きやうとする意志が働き導いてゐたので、此の意志は後になつて、世界の最も完全な現象の中にも現はれて出る如く、世界の形成される太初に於ても、嚴密な自然法を通じて自らの目的を達成するために働き、世界の建設と秩序とに必要な堅固の基礎を備へつけ、物體の根本的な働き方とか、黃道の傾斜とか、自轉の速度とかを永久的に確定し、かうしてその全體性は此等の原始的な自然力そのものゝ中に活動してゐたのであるか

ら、世界といふもの、總結果もやはりその全本性が顯現したものに外ならない。そこで丁度此れと同様に、一々の人間の行爲を決定する外部の出來事も、それ等を生せしめる因果關係の聯絡とても、やはり只この同じ意志の客觀化であつて、此の意志は、一々の個人そのもの、中にも自らを現はしてゐるのである。それ故、恰も霧を通して見ると云ふ具合ではあるが、此れ等の出來事もやはり、各個人のも最も特殊な目的に合致し順應してゐなければならぬと云ふ事が認められ、随つて又、此の意味から見た此れ等の出來事は、各個人の運命を導き、その守り本尊、超自然者の豫定的先見として寓話的に呼ばれてゐる秘密な力そのものである。然し又、純粹に客觀的に觀察してみると、そこには只一切を包容して剩す所のない因果の聯絡があるのみで——凡ての起つて來る事は、此の聯絡に随つてどこ迄も必然に起つて出る。そこで又、この意味での因果の聯絡は、神話的に説かれてゐる世界の統御と云ふ事を行つてゐるのであるから、むしろ世界の統御者と呼ばれるべきものである。

尙此の點を一層明白に理解しやうとするには、多分、次の一般的な考察が役立つであらうと思ふ。即ち「偶然」と云ふことは、因果關係の上で結び合つてゐない事が時間の中で一緒に出會ふことである。然るに、眞實を云ふと、絶対に偶然なものとは何もなく、最も偶然な事ですら、一層遠い迂路を歴めぐつて來た必然事である。即ち、因果鎖網の中のすつと上部にあつた色々の原因が、もはやすつと以前から必然的に決定されてゐた爲めに、その結果として、丁度今になつて、その直接誘因たる他の事と同時にその事が現はれて出たのである。更に云ふと、一々の出來事は、原因結果の連鎖に屬する、一々の環で、此の連鎖は時間の方向につれて進行する。ところがそこには空間と云ふものがあるから、斯様な連鎖は相列んで無數に存する。然るに又、此れ等は互に全然無縁なものではなく、又相互間に何等の聯絡をも有しないものではなく、むしろ此れ等は多岐多様に相結ばれ合つてゐる。例へば、今同時に働いてゐる幾多の原因は、その一つ／＼が別の結果を生せしめはするもの、因果鎖網をもつと

上部の方へたどつてみると、皆が一つの共通な原因から出て来たのであり、随つて相互は恰も多くの曾孫が曾祖父に對すると同じやうな親縁を有つてゐる。又他の場合には、今現はれてゐる一つの結果が、幾多の相異つた原因の合體した働きを待つて生ずることも屢々で、而も此等の原因の一つは、各自の專屬してゐる特殊な因果連鎖の一部として遠い過去から働いて出たのである。かうして此等の凡ての因果連鎖は、各自が時間の方向に向つて進展すると共に、皆で一つの大きな、共通した多岐多様に結ばれあつた網を作つて居り、此の網全體も亦、その全體の廣りに於て時間の方向に前進して行くが、それが即ち世界の進行なるものである。それ故、こゝで我々が、それ等の一々の因果連鎖を子午線として想ひ浮べ、この子午線は時間の方向に畫かれてゐるとしてみたなら、同時に起つて出る事と、随つて又直接には因果的に聯絡してゐない出來事とは、何處でも並行圈として(圖式的に)書き表はすことが出來やう。そこで此れ等の並行圈の中に置かれてゐる事は、相互で、直接の依屬關係を有してはゐないが、

然し此等の圖を一括にした大きな網には繋りがあり、又あらゆる原因と結果とは全體として時間の方向に進展して行くから、間接には遠いながらも何等かの結合をして居り、随つてそれ等が今の時に於て同時に起つて出ると云ふのは一つの必然な成行きである。又、一層高い意味で必然的な出來事と呼ばれてゐるもの(大きな悲劇的事件などの色々な條件が偶然に合致して出るのも此の點に基いた事で、普通には、斯様な出來事の生ずるのを運命の選びに由つたものと云ふ風に考へてゐる。又同じ理由から來てゐる實例の一つを挙げると、民族の移動に伴つて野蠻の潮がヨーロッパへ流れ込んで來ると、ラオーコオンとかヴァチカーンのアーボルなどを初め、ギリシヤの最も美しい彫刻品は、恰も舞臺の落し戸を通じての如くに影を潜めて了ひ、何等の傷害をも受けない秘密の場所に埋れて一世紀といふ永い間を過ごし、一層高等で文化的な、美術を評價し觀賞し得る時代の到來するのを待ち、十五世紀の終り、法王ユーリウス二世の時になつてやつと、不思議に湮滅を免れた美術の模範、人體の眞實な典型として明るみ

へ出て来たのである。又それと同様に、各個人の生涯の中で、重大な決定的な機会とか事情とか、丁度適切な時期になつて出て来ることや、又は前兆が現れると云ふ事も此の點に基いてゐて、此の前兆についての信仰は一般的で根絶されないもの、どんな理性的の頭脳にも宿つて出る。即ち、何事も絶對な偶事として起つて来るのではなく、むしろ一切の事は必然に現はれて出て、因果的には聯絡のない事が同時に起つて出る事、所謂偶然の出来事と呼ばれてゐるものすらも必然の現れで、今同時に現はれて出た事も、もはやすつと遠い過去の原因に由つて決定されてゐたのであるから、要するに凡ての事は共々に照らし合ひ共々に鳴り合ひ、相應じ相合致してゐるとしなればならない。そこで又、(醫學の鼻祖) ヒッポクラテスが「De alimento」: [食物論](キーン編全集、第二卷、二〇頁)の中で、有機体内での一致的働きについて言つてゐる事は、事物全體についても言ひ得らるのである。Σαππων μω, σφβρωω μω, σογπρωβωω μω (凡てのものは一に流れ合ひ一に息づき一に融け合ふ)。——人間に前兆を注意

するといふ根絶し難い傾向のある事、extispicia (犠牲の臍臓を見て占ふこと) opusbona (鳥の鳴き聲や飛び方で判断すること)、聖書占ひ、骨牌判断、鉛の溶かしたのや珈琲の滓を見て占ひをすること、此れ等は何れも皆、人間が理性の示してくれる根據だけに飽き足らないで、何うにかしたなら、自分の眼前に現はれてゐる事、はつきりと見えてゐる事から、空間と時間とに堰かれ隠されてゐる事、遠くにある事未來の事を知り得るに違ひないと信じてゐることの證據である。又實際、若しも人間が眞實の前兆を捉へ、その暗號文字を正當に判讀する事が出来さへすれば、現在の目前の事から遠い未來を判知し得る筈である。

又第二の類似として、此れとは全然異つた方向から、我々の今考究してゐる超絶的宿命といふ事の間接な理會を得せしめるのは夢である。一體でこの人生そのものからが夢に似てゐると云ふ事は昔から明白に告白されてゐて、カントの超絶的觀念論ですら、我々の意識的存在が夢のやうな性質のものであると云ふ事を最も明晰に言ひ表はした

ものとして見る事が出来る。此の事は、私の『カント哲學の批評』の中でも述べておいた。——又實際、恰も霧を通してと云ふ風ではあるが、我々はこの夢といふ類似に依つて、我々に關係して出る外部の出來事を、それ等が我々に對して有する目的通りに支配し導く秘密の力も、きつと我々自身の不可測な本性に根ざしてゐるのだと云ふことを感知する。即ち夢の中でも、そこでの我々の行動の動機となる事情が、我々自身とは獨立した事情、否我々に依つて屢々忌み避けられてゐる事情、全くの偶然的な外部の事情として一緒に現はれるが、而もそれ等の間には一つの秘密な計畫的の聯結があつて、夢の中の凡ての偶事を統べてゐる一つの隱微な力は、同時に又それ等の事情をも支配し、而も一に只(それ等と)我々との關聯上に於てのみそれ等を導き案配する。して、此の點について最も驚かれるのは、此の力が、その正體を突きとめてみると我々自身の意志であつて、それ以外には何物でもないと云ふ事である。然るに、此の力が我々自身の意志であると云ふ事は特殊の高い立場からのみ認められ、この立場は我々

の夢を見てゐる間の意識には入らない。それ故、夢の中の色々な出來事は、我々の夢の中の願望とは全然反對したものであるとして現はれ、我々は驚いたり、嫌がつたり、否恐れたり苦悶したりするが、我々が自分で秘密に繰りひろげて行く(自分自身の)運命は、此の場合に、かうした我々の窮狀を助けやうともしない。そこで此の場合の情態は程度、我々が熱心に或る事を尋ねた時に、一つの豫期以外な答へを得て驚き惑ふやうなもの、又は試験を受ける時の如くに、我々自身が問をかけられて答へることが出來ずにあると、他の者が立派に答へてくれたので赤面するのと似てゐる。即ちそのどちらの場合でも、答へはきまつて只、我々自身といふものを仲介にして與へられたのである。又、斯様に夢の中の出來事は、秘密の通路から我々自身に依つて導かれるのであるが、此の事を一層明白に認め、その間の消息を一層精確に會得しやうとするには、最一つの極めて適切な解明に據るべきであるが、此の解明は淫事に關したものであるから、私は、讀者が此の論述を味ひ得るだけの價值を有つてゐると信じて、先づ彼等

が、此の解明に依つて悪感を起したり、又はそれを滑稽的方面から眺めたりするやうな事のないものと豫定してかゝる。即ち人々の熟知してゐる如く、夢のなかには一つの物質的な目的に仕へる爲めのもの、即ち過量となつた精液を排出する爲めのものがある。随つて此の種の夢には猥褻の場面が出て来るが、それ等は此のやうな目的を有つてゐない他の夢にも出て来る。そこで双方の相違を云ふと、第一種の夢では美人と機會とが直ぐと好都合に出て来て自然の目的が達せられるが、反對に他の種類の夢では我々が最も熱心に慾望してゐる事柄に對して絶えず新しい故障が生じ、我々はそれを押し除けやうとするが旨く行かず、結局目ざした事を爲すに終る。然るに、此等の故障を生せしめて、我々の強烈な願望を遮り破るものは何であるかと云ふにそれは外ならぬ我々自身の意志であつて、只此の場合の此の意志は、夢中に現識をしてゐる意識とはずつと懸け離れたところに存し、随つて夢の中では我々が自分で何うする事も出来ない運命として現はれる。——してみると、現實生活の運命と、我々が

自分の生涯を顧みてその中に認める計畫的の導きとは、かうした夢の中に働く運命と同じ種類のものではなからうか？ 現に時とする、我々が、一つの計畫を作つて熱心に實行し出した後で、それが少しも我々自身の眞實の幸福に寄與するものでないことが分つて来ることもある。然るに、それ迄は着々とその遂行にあせつてゐるが、なんだかそれに對して運命が意地悪く構へ、そのあらゆる機械的な術策を施してそれを失敗に歸せしめ様としてゐるらしく感ぜられる。ところが、その實我々は運命の此の對抗に恵まれて遂には自分の意欲にさかつた道、眞實に自分自身へ適應した道へ連れ戻される。斯様な意圖的と見られる運命の對抗については、多くの人々がよく、「どうも此の事は旨く行かないらしい」と云ひ、又この對抗の事を前兆的だとか神の指しであるとか云つてゐるが、彼等は何れも皆、「運命がそれ程の明白な執拗さで我々の計畫に反抗してゐる時はそれを断念すべきで、斯様な計畫は、我々の意識してゐない我々自身の天分に適はないものであり、随つて本當には實現され得るものでなく、我々が

頑固にその遂行を續けてみたところで、運命から一層強い當て身を喰はされて、揚句の果にやつと自分の正しい道へ連れ戻されるばかりであり、若し又それを實現せしめ得たとしても、それは我々の不幸を招來するだけである』とかう云ふ考へ方をしてゐるのである。上に引用したセネカの句、*duncunt volentem fata, noquentem trahunt* (運命は從順なる者を導き誘ひ、不從順の者は手荒に引擦つて行く)はきつぱりと此の點に當てはまる。大概の場合について云ふと、我々は後になつて初めて、斯様な計畫の挫折したのは、むしろ全く、我々の眞實の幸福を護り助けることになつたのだと云ふ事に氣付く。随つて又、我々が明白にさうと氣付かなくとも、實際にはさうなつてゐる場合もあつて、斯様な場合の如何に多いかは、我々の眞實の幸福なるものが形而上的道德的のものであつて、當の我々自身には明白に認められてゐないのが常である事を顧みれば分る。——然るに、こゝで一轉して私の哲學全體の主要な結果に立戻り、世界現象を表はし維持してゐるのは意志であつて、此意志は同時に又一々の個體の中に

生き働いてゐる事を考へ、更に又、生存と夢との類似が一般に認められてゐることを想ひ合せてみると、今までに述べたこと全體の結果として、全然一般的に、次の事が有り得ると考へられて來る。即ち、一々の人間は自分の夢に對する秘密の舞臺監督であると同様に、我々の現實の生涯を支配する運命なるものも、何うにかして結局は今云つた意志、我々自身の意志から出て來たのであり。この意志は、此の場合に一つの遠い方面から働いて運命として現はれ、この方面は我々の現識をする個體的意識とは餘程隔つたところにあつて、意識は動機を提示するだけの事をし、此れ等が我々の經驗的に認識される個體意志を指導し、随つてこの個體的意志は、遠い方面から運命として現はれる我々の意志と激しい戦ひを演ずることが屢々で、此の後の意志こそは、所謂我々の導きの精靈、我々以外にあつて、天上の星に座を占めてゐる「守り本尊」である。して、此の意志は個體的意識よりもずつと勝れたものであるから、それに對しては容捨なく壓迫や拘束を強ひ、外部からの強制として特殊の運命的結果を生せしめる

が、個體的意識は此の結果を正解し得ない場合が多く、而も此の意志は（捨離解脱と云ふ目的の爲めに）それが意識の力で發見され正解されることを切望してゐる。

かうして我々は本論での見解をどうにかして解し易くするつもりで、一般によく認められてゐる個體的生存と夢との類似（アナロジー）を借りて來たが、他方では双方の間に次のやうな相違のある事をも確認しておかなければならない、即ち單なる夢の中では凡ての關係が一方に偏つて居り、詳しく云ふと實際に意志し感得してゐるのは一つの「我れ」のみであるが、反對に生存と云ふ大きな夢の中では交互的な關係が出来てゐて、一々の人は自分の（生存といふ）夢の中に現はれてゐるのみでなく、一方では又他人の夢の中に現はれて必要な脇役者となつてゐる。それ故、そこには一つの實際的な Harmonia Praestabilita（豫定的調和）がとれてゐて、その爲めに一々の人は、彼自身にとつての形而上的な導きから見て彼に適應した事だけを夢み、そこで凡ての生存の夢は精緻に結ばれ編み合はされてゐて、凡ての人は（形而上的の意味で）彼の利となる事を経験

すると同時に他人にとつての必要な事を行つてゐるから、大局から云ふと、一つの大きな「世界全體の出來事」が、絶えず「自ら」を無數の個人の運命に適應せしめ、一々の人に對して、一つの個人的な方法をとつて「それ自ら」を順應せしめてゐる。それ故、一個人の生涯に起つて來る凡ての出來事は、二つの根本的に數を異にした聯絡の中に置かれてゐると見てよい。即ち、第一には自然の進行に存する客觀的因果的聯絡の中に置かれ、第二には一つの主觀的な聯絡の中に現はれるが、此の後の聯絡は、夫等の出來事を實地に經驗する個人に關係してのみ存し、隨つてその者の見る夢と同程度に主觀的なもので、其中では、その連続と内容とが第一の場合と同程度に必然的な決定を與へられてゐると共に、その決定されてゐる工合は、戯曲の中の場面の連続が作者の構想に依つて決定されてゐると同様である。それから、此の二つの種類の聯絡が同時に存し、同一の出來事が、二つの全然異つた連鎖の環としてどちらへも丁度よく篋まり、その結果としていつでも、一人の者の運命は他の者の運命に適合し、

一々の人間は自分自身の生存といふ演劇の主人公であると共に、同時に又他人の演劇中に於ても助役となつてゐると云ふ事、それはもはや我々のあらゆる理會力を超絶した事柄であつて、只最も驚異すべき harmonia praestabilita (豫定的調和) に基いて生じ得るとしか考へられない。而も此の事が判然と理會されないからと云つて、凡ての人間の生涯は、恰も作曲家がその合奏曲(サンフォニー)の中で、一寸聴くと互ひに亂れ騒いでゐるやうな澤山の音に concentus (輻聚) と harmonia (調和) とを與へると同様に、やはり相互の接觸や交渉に於て充分な輻聚と調和を現はしてゐると云ふ假定に對して、それを不可能だと云つて排斥するのは餘りに狹量な態度である。又、今云つたやうな運命觀はあまりに廣大で一種の畏怖心をすら起させるが、この恐れは、世界全體の大きな生存の夢には生きやうとする意志といふ唯一つの主體があるだけで、現象の一切の多相は時間と空間とを豫件として假現したものに過ぎないと云ふ事を想起したなら、それで餘程に輕減されたやうと思ふ。要するに、世界には一つの生きやうとする意志とい

ふ本性があり、それが一つの大きな夢をみてゐるので、同時に又凡ての個身も共々に此の夢をみてゐるのである。それ故、一切の事凡てのものは互ひに相交渉し相適應してゐるのである。そこで、我々がずつと此の點に考へを進めてみると、——それから又、凡ての出來事には二重の連鎖がある事、その爲めに一々の生物は、一方からみると自分自らの爲めに存在し、自分の天性に隨つて必然に行爲し活動し、自分自らの道程を歩んでゐるが、而も又他方に於ては、全然只、自分を他の者に會得せしめる爲め、他の者に働きかける爲めのものとして存し、恰も他の者の夢の中の形像と同じく、一つの適切な要素として他の者の生存に加はり取り入れられてゐると云ふ事を假定してみると、——此の眞理は我々人間のみでなく自然全體の上に及ぼさるべきであり、隨つて動物にも認識のない生物にも適用さるべきだと云ふ事 (人間同士の斯様な關聯は同時に又一切生物に共通した關聯) を認め得るであらう。してこゝまで考慮を深めて來ると、先に説いた前兆 (omina) とか豫徵 (praesagia) とか (妖孽) portenta とかの有り得ると云ふ事が

最一度見透かされて来る。即ち、自然の進行に随つて必然に出て来る事は、それを他の方面からみると、自分にとつての單なる形像、自分といふ一個人の生存の夢に必要^な置人物^(おきじんぶつ) (* 繪畫の中に主像の取合せとして描かれる一群の人物) として、どこ迄も只自分との關聯に於てのみ起つたり存したりするのであり、或は又、自分といふ者の行爲と經驗的生活との單なる反射であり反響である。そこで、かう觀て來ると、一つの出來事が自^然的^のものである事と、因果の上から證明さるべき必然のものである事とは、決してその爲に前兆なるもの、現出を不可能としてゐるのではなく、同様に前兆の現出し得ると云ふ事もその出來事に自然性と必然性のある事を打消しはしない。それ故、或る出來事が前兆に先たれると云ふ事を拒否しやうとして、その原因が自然的必然的に働いてゐる事は明白であるから、それは單に避く可らざるものとして出現するに過ぎない^{と云ひ}、殊にそれが一つの自然現象であると、如何にも學者らしい容態ぶりをして、その出現を物理的にのみ説明して得意がる者は全くの間違に陥つてゐるのである。即

ち苟も理性の働きを具へてゐる程の人であつたなら斯様な原因の存することを疑ふものではなく、又何人も前兆を(超自然の)奇蹟として見るものはないが、然し乍ら、無限に溯られる原因結果の連鎖は、それに固有の嚴密な必然性と人力では前知することの出來ない豫^{プレジスチナチオン}定^ンとに依つて、或る出來事が丁度此の重大な時機に於て不可避的に出現する事を決定してゐたのであるから、随つて此の出來事には前兆に先たれると云ふ事が有り得るとしなればならない。それ故、物理學くらゐで一切を解釋しやうとする猪口才な連中に對しては、there are more things in heaven and earth, than are dreamt of in your philosophy (天地間にはお前達の哲學で夢想されるのよりかもつと多くの事がある)『ハムレット』(二幕五場)と云つてやるのが一番に手答へがあらう。然るに又、この前兆^{オミナシ}が信じられ得ると共に、そこには昔しの占星學を復活せしむべき餘地も認められて來る。即ち前兆として見られる極く些細な出來事、例へば一羽の鳥が飛んでゐるとか、一人の人に出逢つたとかと云ふ事は、星が或る一定の時期に豫算された通り

の位置を占めるのと同様に、一つの無限に永い、又嚴密に必然的な原因の連鎖として生ずるのであるが、只星宿の方は高々と天上に現はれてゐて、地球上の半數者が同時にそれを眺め得るのと違つて、前兆の方は特殊な關係者に依つて、限られた範圍内のみ認められる。尙又、前兆の有り得る事を一つの形容を通じて明らかめたいと思ふなら、或る者が生涯の中で一つの重大な行動に出で、その結果はまだ未來に蔽ひ隠されてゐるものゝ、一つの吉兆か凶兆かを認めて勇氣を増すか警戒心を起したと云ふ場合を想定して、その者を弾き出されたばかりの絃に喩へてみたらよからう。即ちその絃は自分自らの音(行動の結果)は聞き得ないが、その振動の結果として共鳴りする他の絃の音(前兆)を聞くことが出来る。

カントが物自爾と現象とを區別した事と、私が更に前者を意志に後者を心識に歸せしめた事を立場にすると、次の三つの反對が有り得ると云ふ事も、又それ等が結合し得ると云ふ事も認められて来る。只我々のこの認め方は不完全であり、恰も遠くの方

から臚ろに望み得ると云つたやうなものたるに過ぎない。

三つの反對とは、

(一) 意志がそれ自らに於て有する自由と、個體のあらゆる行爲がどこ迄も必然的である事との相違、

(二) 自然の機械制と技巧と、又は nexus effectivus (能成の聯絡) と nexus finalis (終成の聯絡) と又は自然の作り出したものが純粹に因果的にも説明され、ば意匠論的にも説明され得る事との相違、(カントの『判断力批判』七八節、又私の主著、二卷二

六章、三三四—三三九頁、—三版、三七九—三八七)。

(三) 個人の生涯に於て凡ての出來事が明白な偶然性を帯びて生ずる事と、個體に對する形而上的の目的性に準つて、それ等が此の生涯を形づくる爲めの道德的必然性を有つてゐる事との相違、—又は通俗の言ひ方で云ふと、自然の成行きと豫定的先見(又は攝理)との相違。

此の三通りの相違のどれもが調停され得る事は認められるが、我々の此の認め方は何の相違についても完全といふほどの明るさには達してゐないと共に、第一と第二との相違については先づ充分と云へるほどの明るさが得られ、一番に判然しないのは第三の相違についてである。が、それにしても、假令不完全にもせよ、此等の相違の一つ一つが調停され得る事を認めてしまへば、それが他の二つに對して形容なり比喩なりとして役立つ、随つてお互が光明を與へ合ふことになる。

個人の生涯が秘密な導きの下に進んで行く事は今までに観察した通りであるが、此の導きが眞實に何事を目途にしてゐるかは、只極めて一般的にしか説明され得ない。若し我々が個々の場合に止つてゐると、恰も此の導きは我々の時間的一時的な利福を眼中に置いてゐるらしく見えることが多い。然し此のやうな利福は、一片の些事であり不完全な有りふれた疾過するものであるから、到底眞面目には此の導きの最終目的として見る事が出来ない。それ故に我々は、個體的生存以外に及んでゐる我々の永

遠な存在の中にそれを求むべきである。さうして此の場合に云ひ得られるのは、どこ迄も只一般的の事で、我々の生涯は此の導きに依つて統べ整へられるから、そこで我々の生涯を通じて出て来る認識の全體からは、人間の核實であり自爾本性である意志に對して形而上に有目的な印象が與へられることになる。即ち、生きやうとする意志は、自らの努力の現れである世界全體の一般的な進行に於て自らにとつての解答（自らの歸趨に関する解明）を得るのであるが、それと共に又、一々の人間は、全然、個體的な單獨な状態の下に於ける同じ生きやうとする意志であり、別言すると此の意志の個體化せられた行動（現象と經驗に先つ意志行動）であるから、随つて此の（先天的な意志行動としての）意志にとつての充分な解答は、全然特殊な形に於ける世界の進行、即ち單獨な個體的經驗の中から見出されねばならない。然るに我々は、私の眞面目な（單なる教授哲學やお道化哲學と違つた）哲學の結論からして、生きやうとする意志を棄却する事が現世的存在の最終目的であると認めておいたから、一々の人間は、彼に對して全然的に適

應せしめられた方法に依つて、故に又遠い廻り路をして、段々に此の目的へ導かれて行くのだと云ふ事を假定し得る。そこで又、幸福と快樂とは眞實のところ此の目的に逆つたものであるから、我々が現に實見してゐる如く、一々の生涯の中では、此の目的に順應して、不幸と悩みとが避け難いものとなつてゐるが、只その度合には色々の差等があり、又それが溢れるほどになつてゐる場合、即ち悲劇的の破綻を生せしめる場合は稀れにしかない。して、或る生涯の中に斯様な悲劇的の大不幸が生じた場合は、恰も意志が或る種の強制的な方法で生存の棄絶に追ひやられたのであると観られるし、或は又、帝王切開術(*子宮を切開して胎児を取り出す産科手術)を通じて更生を得るのだとも云つてよからう。

斯くの如く、我々の生涯には見えない導きを加はつてみて、此の導きは只臆氣にのみ認められるのであるが、それが最後の到達點として我々を連れこむのは死で、この死は、生存の眞實な結果であると共に、その限りでは生存の目的ともなつてゐる。そこ

一 死の瞬間には、人間と云ふもの、永遠の運命を決定する凡ての祕密な力(而もそれは眞實には我々自身の中に根ざしてゐる)が相聚合して働き出す。さうして此の或は合致し或は衝突する共々の働きからして、その人間が死後に辿るべき道が生じ、換言すると彼の復生(Palingensie)が豫備され、その中に含まつてゐる一切の幸不幸が、此の時にもはや變更され得ないものとして、確實に豫定される。——人間の死ぬ時には、その臨終が、最も嚴かな、最も重大な、何かの眞に迫つたやうな、如何にも畏ろしげな事と見られるのも、丁度その瞬間に斯様な重大事が決定されるからである。それ故に死は最も嚴密な意味での更轉期、——或は又(クリスト教の用語で云ふと)最後の審判である。

人生達觀終

大正十三年三月九日印刷
大正十三年三月十二日發行

人生達觀
定價金貳圓七拾錢

譯者

增富平藏

發行者

東京市本郷區西片町十番地
鶴田久作

印刷者

東京市牛込區早稻田鶴卷町百四十一番地
吉原良三

印刷所

東京市牛込區早稻田鶴卷町百四十一番地
康文社印刷所

~~~~~  
有所權著作  
~~~~~

東京市本郷區西片町十番地

發行所

玄黃社

電話小石川一三九番
振替東京七九九五番

逸獨 ショーペンハウエル著 増富平藏譯 (六版)

處世哲學

四六判總洋布製
紙數四百七十頁
定價貳圓八拾錢
郵稅十二錢

シヨールペンハウエルの處世論は類書中の最尊也。偉大なる哲學者「人間を知れる者」としての著者が晩年に於ける深遠の觀察と老熟の思想とを挈げて人間處世の妙諦を説き人生に於ける明暗、幸不幸、安危、得失の根源を論じて人を懸くるが如く、譯文亦明快を極む。

目次	◎第一章 根本的區分	◎第二章 實我(人格)について
	◎第三章 物我(所有物)について	◎第四章 社會我(名聲)について
	◎第五章 實際論	◎第六章 年齢論

亦平易明快此種の譯書に通有なる難解の辭句を羅列せざるは喜ぶべし。——東京朝日新聞批評

玄黃社發行現在品書目

(品切中のものを除く)

●新時代の國民的名著 最新刊

安岡 正篤 著

日本精神の研究

四六判總洋布製
紙數約四百頁
定價貳圓五拾錢
郵稅十一錢

文明の爛熟人間の頹廢が堪へ難くなつた時、俄然として天は社會に一大警醒を與へた。人々は今更の様に懼然として過古を顧み未來を案じて居る。抑々我等何を頼み、如何に生くべきか、是れ時代の切なる要求ではないか。然るにこの切實な時代の要求に對して、學究的著作に英靈乏しく、警世的議論に思索が無くて、いづれも到底人心を満足さすに足りない。この時醇乎たる國士的人格と該博な學識と深厚な思索とを以て眞に國民を教ふる者は著者である。本書は著者が多年の參學から體認し得た日本精神の眞髓を獨得の靈筆を揮うて舉揚したもので、之を讀んで人々は幾度か卷を掩うて無量の感激と冥想を味はずには居られないであらう。

且つ日本海々戰の勇將として、其の學識人格一世に推重せらるゝ海軍大將八代六郎氏、亞細亞問題の最高權威として其の學問人物青年の崇拜渥き國士大川周明氏が平素著者と忘年の道交あるあり、心を傾けて本書に寄せたる跋も亦得難く尊いものである。

増富平藏 譯

(三版)

シヨールペンハウエル 隨想錄

橋本邦助氏裝
四六版總クローヌ
定價貳圓六拾錢
郵稅十二錢

本書は、將一切の精神的又道德的文明の根柢（ドイツセン教授評語）とすべき者（ワグネル評語）と云はれ、或は形而

上學の完成者（ドイツセン教授評語）とすべき者（ワグネル評語）と云はれ、或は形而

倫理宗教の眞理、處世の指南（下は）、男女間の葛藤（等）に至るまで思

流の人生觀を吐露せる短文實に四百餘章、譯筆亦シヨールの私淑者増富先生が三たび稿を更へたり

と言はるゝほど極度の苦心を重ねたるものにて、警拔の想、明快の文、相俟つて近來の好譯本たるを疑はず。

●時事新報「譯筆の正確にし力強き」は原著の面影を髣髴せしめて遺憾なく、近來出色の譯書べし

西班牙バルタザール・グラチアーン原著
獨逸シヨールペンハウエル獨譯

增富平藏重譯

(再版)

處世神訣

四六判總洋布製
紙數二百八十頁
定價壹圓八拾錢
郵稅十錢

●「處世哲學」の姉妹篇！

本書原名は「處世に關する神の御告げ」と題せられ、獨「全世界に於ける最も鋭敏慧黠の國民なる西班牙人の一人にして始めてよく斯くの如き書籍を著はし得」と云。全編三百章所謂「精言は一珠」の觀を呈し、簡勁警拔の文辭を以て正經と權道とを併せ説き、譬喩形容の類は特殊の繪畫味と地方色とにみちて毫も讀者に倦怠を課せず。袖中の利刀として政治家外交官の愛誦措かざる所。歐洲に於ては夙に

笹川臨風著

▲杉浦非水裝幀
▲寫眞版三十枚入

日本繪畫史

卷上

菊判總布製函入
紙數五百餘頁
定價五圓五十錢
送料(内地三十六錢
其他六十五錢)

我國唯一の
大繪畫史

我邦上下三千年の繪畫の發達變遷に就いては之を一貫せる成書甚だ乏しく、偶々之あるも多くは簡疎にして其大略を記すに止まれり。著者之を憾みとし、十年間の苦心を以て研鑽につとめ、博引旁證遂に尤然一千二百頁の上下二卷を述作し、今其上卷を公にす。上卷收むる所、上代より東山時代の終に至り、脈絡整然、祕鑰を開いて畫界の別乾坤を紹介す。著者は久しく美術界に關與し、其批評は世に定評ありて、斯界の權威と稱せらるる人、加ふるに行文は流麗、暢達、高山流水の如し、苟くも美術を愛好する人は必ず一本を藏せざるべからず。

中村不折 小鹿青雲共著 (四版)

支那繪畫史

不折畫伯裝釘意匠
菊判總クローヌ
製美本 全一冊
定價貳圓六拾錢
郵稅十 二 錢

▼我國に於ける始めての新著

支那繪畫は日本繪畫の父母也、支那繪畫を知らずして日本繪畫を語るは妄なり、本書は斯道のオーソリチーたる著者が多年の蘊蓄を傾盡して着手以來實に三年餘の星霜を経て完成せられ、添ふるに支那各時代代表畫の頁大アート刷寫眞版二十九葉とを以てせるものなれば、本書は即ち兼ては支那代表畫の畫帖と見るべく或は支那畫家人名辭書とも見るべく美術に志あるもの、必ず一本を缺く可らざるもの也。

●時事新報評 「吾人は本書を本邦唯一の支那繪畫史として深く推賞する也」

曹洞宗大學學長 忽滑谷快天著 (上卷)

禪學思想史

菊判總布製函入
肖像畫三葉入
紙數八百頁
定價六圓五拾錢
送料 內三十六錢
其他六十五錢

▼禪家に未だ曾て思想史あらず、本書を以て嚆矢とす。

禪なるものは、本來が至簡至易、至明至瞭のもので、初祖より六祖に至るまでは、誠に醇乎として醇なる所謂純禪なるものであつた。然るに六祖滅後、棒雨喝雷、幽玄奇語が熾んに禪界に行はれ、人は大道を捨て、小徑に走り、竟に至簡至易の坦道を化して、鉤章棘句の峻坂險路と成し了つたのである。著者の緒言に云ふ「予、夙に斯道の復古を以て自ら任じ、筆舌二つながら用ひて、學者の心證に訴へ、以て達磨禪を鼓吹する、こゝに二十餘載、而も參玄の士女、多くは古今禪道の變遷を知らず、宗匠と稱せらるゝもの、亦往々、禪弊を錯會して以て佛法と爲す者あり、是れ皆禪學の史實に暗きの致す所なり。是を以て支竺二國に於ける禪の起原を釋ね、其衰亡の由來を述べ、以て本書を著はす」。

印度マドラス
大學教授
曹洞宗教授

ナラ ス原 著
立花 俊道 譯
(六版)

釋尊像、アジヤン
タ壁畫等の寫真版
十葉 入

佛 教 の 要 諦

四六版總クローヌ
紙數約六百頁
定價金參圓貳拾錢
郵 稅 十 二 錢

慘憺たる戰雲收まつて今後世界を擧げて最も喧しがるべきは **思想問題** である。想前人未踏の **饒地** を發見して將に

新文明 を培ふ **一大資源** は、恐らく **現代の科學的新眼光** に照らせる佛教の

か。本書は最も的確に之を證明するものである。本書一度び出づるや、**印度本國** の學徒は **歐米** の識者は競つて之を **カルカツ**

タ大學、マドラス大學 を始め、**英米** の諸大 **指定參考書** としてゐる。著者は最新の

眞摯なる佛教信者である、翻譯はまた原著者の許諾を得て苦心洗練を重ねた明快な全譯である。

「……余は佛教の智識を得んと欲する萬人に此書の熟讀を勸む、憶ふに此の書は斯かる主題に關する空前の良書と稱するを得ん」——スマンガラ大僧正

(スマンガラ大僧正は云ふ迄も無く印度に於ける世界的碩學で)

慶應 大學 教授 戸川 秋骨 譯

▲四六判總クローヌ製高雅美本

エマーソン論文集

●上 卷 定價 金 參 圓
●下 卷 定價 貳 圓 五 拾 錢
郵 稅 十 二 錢

近代に於ける最も幽玄にして最も健全なる思想家はエマーソンなり。加之其文辭最も簡潔にして又最も雄勁に、句々みな座右の銘とするに足る。本書の譯文又精確、忠實と懇切とを盡し、恰も原文に接するの感あらむ。苟も思想界の事に留意するもの必ず一讀すべき也。

- ▲▲▲ 歴 史 論
- ▲▲▲ 戀 愛 論
- ▲▲▲ 大 靈 論
- ▲▲▲ 自 恃 論
- ▲▲▲ 友 情 論
- ▲▲▲ 圓 環 論
- ▲▲▲ 報 償 論
- ▲▲▲ 細 慮 論
- ▲▲▲ 智 力 論
- ▲▲▲ 靈 法 論
- ▲▲▲ 勇 壯 論
- ▲▲▲ 藝 術 論

- ▲▲▲ 詩 人 論
- ▲▲▲ 作 法 論
- ▲▲▲ 政 治 論
- ▲▲▲ 經 驗 論
- ▲▲▲ 進 物 論
- ▲▲▲ 名 目 論
- ▲▲▲ 人 格 論
- ▲▲▲ 自 然 論
- ▲▲▲ 改 革 論

卷 下 (版九)

卷 上 (版六十)

逸獨ヘツケル博士著・文學士 栗原古城譯 (十二版)

宇宙の謎

四六判總洋布製
紙數六百三十頁
定價參圓
郵稅十二錢

「樹木だけ見て森を見」と「森だけ見て其一つの樹」即ち「科學と哲學との間、實驗と思索との間の不自然なる質の本體、人類の起源、生命の現象、心靈の本質等、永遠の神祕に對して人間理智の極致を盡せると同時に、著者の徹底せる人生觀、社會觀を述べたものが本書「宇宙のなぞ」である。荷も**智識欲**あ**讀者**は**其興味は小説以上**であらう。獨逸に於ける科學界の最大大家、專攻の生物學に於ては世界第一の泰斗と仰がる、ばかりでな 又有名の大思想家である。而して本書が如何に歐洲の讀書界を震撼したるかば、其發賣後多年を出でざる今日獨逸本國にて **數十萬部** 英譯の **十四萬部** の賣行を見たりと云ふ事實に見ても其一端が知れよう。譯筆の明快は云ふ迄もない。

◎「少しく心ある人にして「宇宙知らざれば人は無かるべし……譯筆快暢にして凝滞なし」——高朝朝東
◎「同教授一代の研究を壓搾したるのみならず、實に歐洲の科學界哲學界を震撼せしめ名著」——高朝朝東

ノベル賞金を得たる、白耳義國文豪

マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯 (十九版)

死後は如何

附録「交靈術とは何ぞや」
四六判一冊製
定價壹圓九拾錢
郵稅十錢

將來の
世界の
支配す
るもの
は心靈
の學也。

人間の死後は、**絶滅**か、**永生**か、**將た「醒むる無きの睡眠」か、既成宗教は其權威果して如何、**而も闇黒の中一、**泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し將**道に輪廻轉生の眞理を説かんとす。現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議なる心靈の現象に動かされ、其神祕的瞑想と、聰明なる理智との高潮に乗じて此大問題を解決せんとしたる者即ち此書也。譯者は將來世界を震撼すべき心靈運動の曉鐘として、本書を提供する者と云へり。

附録「交靈術とは何ぞや」に至りては、真に**人界靈界に互る一大**代社會は、之を讀**戰慄**と**畏怖**るべき也。

英國・パーミン
ガム大學總長

ロツヂ博士著・高橋五郎譯 (七版)

死後の生存

四六判總洋布製
極美本・全一冊
紙數六百拾餘頁
定價 金 參 圓
郵 稅 十 二 錢

新時

代の

驚異

オリバア・ロツヂ博士が無線電信可能の原理を發見せる最初の學者心

靈學者として現今世の第一人者たる事も萬人の知る所である。博士は科學界

其の最新の學説は奇蹟の復興を科學的に立證せる者と云はれてゐる。本書は博士の代表的名著であつ

て、其識見遙かに尋常科學者流の見地を抜くは勿論、洵に新時代の豫言者たる觀がある。いま高橋先生

死後の生存即ち肉體の死後個體靈魂の生存は今や明確に立證せられたと云ふものである。尙

附録として有名なる「靈怪實在論」を添へて

ノベル賞金を得
たる、白耳義文豪

マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯 (七版)

靈智と運命

四六版總洋布製
全 一 冊
定價 金貳圓貳拾錢
郵 稅 十 錢

人間の運命は果して先天的に豫定せられたるものなりや否や

人間は自からの努力によりて其運命を改造し能ふべきや否や、將

た又人間の理性は奈邊まで信賴せらるべきものなりや、こ

れ實に全人類の頭腦を悩まし來れる千古の疑團なり。マーテルリンクは、其思索の有

らん限りを竭して、遠くは不可思議なる神秘境に其思ひを馳せ、近くは日

常生活の一些事をも見逃さずして、所謂「運命」の正體なるものを剔
抉解剖して餘蘊無からしむ。靈智の明鏡、一度輝いて萬妖悉く其影を潛むるの概あり。
求道の士は必ずや空しく本書を看過せざるべきを信す。

英國ラスキン著

文學士

栗原古城譯

永久の歡び

三 四六判總洋布製
定價壹圓八拾錢
郵税 八 錢

文明批評家としてのジョン・ラスキンは、正にカアライル・エマアソンの二大家と雁行し、その人生に切實なる點に於て寧ろトルストイ、ニイチエを凌駕せり。『永久の歡び』は藝術と經濟との調和、理想と現實との融合を説いて美の救済を人生に光被せしめんことを期せる彼が一大獅子吼也、洵に千古萬人の一大福音、苟も眞の書籍を讀まんとする者は必ず本書を逸す可らざる也。

英國ラスキン著

文學士

小林一郎譯

二ツの道

三 四六判總洋布製
定價貳圓參拾錢
郵税 十 錢

ラスキンの藝術論は單なる藝術論に非ず、最高なる人生の批判也。最善なる自然の解釋也。人と自然と相一致して共に其の美を發揮する所に、眞の人生の意義あり。宗教道德の根柢亦此中に存す。ラスキンは終始一貫、此主張の下に文明を論じ藝術を論せり、善き藝術は人を活かし、惡き藝術は人を氓ぼす。活く可き道は如何、亡ぶべき道は何ぞ、之を根本的に説明せるもの、即ち此の「二ツの道」也。

佛國ブーリエンヌ著

文學士 栗原古城譯

▼寫眞版二十二頁入

奈翁實傳

菊判總洋布製函入
紙數九百五十頁
定價五圓五拾錢
送料 内地三十六錢
其他六十五錢

これナポレオンの傳記中古今隨一の名著として定評ある原著の數ある、幼少の頃より奈翁の親友で中年迄其家庭の一員として公私内外の樞機に參畫し、而も後年其反對者としてルイ十八世王の下に國務大臣たりし人、本書が材料の豊富と記事の徹底とを以て古今第一のナポレオン傳と稱せらるゝも偶然でない。有名なるカール・ライル、エマアソン等の奈翁に關する評論も主として材料を之に採つたことは周知の事實で本書を讀まずして奈翁を語るべきで無い。巨人の一生は、人間の一切の性情一切の運命及びその時代との交渉を顯微鏡的に擴大して具體せる人生の教科書である。由來又英雄は悉く改造者である。否、改造それ自身である。今や民衆主義の運動一世を風靡するの秋、本書は其歸趨に關して亦多大の參考資料を供するを疑はない。

安岡正篤 著

(再版)

支那思想及び人物講話

四六判總クロース
紙數四百七十頁
定價金貳圓六拾錢
郵稅十二錢

◎新時代の東洋人に本書を勧む

今や支那は世界問題の中心地である。歐米諸國は皆争うて支那研究に努力して居る。然しながら其の思想及び人物の研究に至つては、まだまだ俄に歐米人の企及することの出来ぬ者が多い。此れを闡明するは實に邦人の獨擅場でなければならぬ。今は是非とも新人の潑刺たる研究を要する。本書は實に此の時代の要求が生んだ最初の好著である。

支那の新しい研究を鶴首して期待して居る現代人は茲に始めて會心の笑を禁じ得ないであらう。幽玄にして博大な支那文化から今迄現代人を隔てて居た難關は、本書に依つて始めて撤去せられた。

著者は幼より支那學に育てられ、長じて泰西哲學に親しみ、其の新頭腦を以て新に支那思想史を研究すること多年、現代に必須なる表現を以て其の蘊蓄を吐露した第一聲である。著者の令名に就いては既に定評がある。

英ラスキン著
文學士
栗原古城譯

胡麻と百合

(版五) 四六判總洋布製
定價貳圓
郵稅八錢

王者の寶庫と女王の花園

芥子よく須彌山を藏す、一粒の胡麻にも亦王者の寶庫なからんや。王者の寶庫は無限無盡藏にして不滅不壞なり。此寶庫を開くの道如何。即ち讀書の鍵を以て古聖賢の心境に參入するにあり。ラスキン此理を説いて悟道修養の方法を示すこと明快適切を極む。「野に咲ける百合の花」はこれ窈窕たる佳人の姿なり、ラスキン此婦人美を讚歎し、進んで女徳の發揚と女王の權威とを涵養すべき所以を論ず、女子教育の眞諦始めて此處に明かなり。卷尾にある「人生の神秘と其藝術」に至つては、一言一句ラスキンが實人生より獲來れる血の出る如き教訓にして、宗教的情調の最も豊かなるもの。正に夕陽西山に春かんとして天地金色に彩らるゝ如き、偉大、崇高、嚴肅の極致を竭せり。以上皆修養書の白眉として江湖既に定評あるもの、流麗の譯筆、懇到の註釋、人間靈性の向上に資するに於て蓋し本書の右に出づるもの少からん。

英
ラスキン著
文學士
小林一郎譯

塵の倫理

三
四六判總洋布製
定價貳圓四拾錢
郵 稅 十 錢

詩人の豊なる想像力と哲人の深き思索力とを兼ね具へたるラスキンの特色は最も鮮かに本書に於て發揮せらる。一の老講師と數人の少女との問答に托して自然界に存する創造力の偉觀を描き出し斯る自然の大法則に基きて人生百般の法則を打建つべきことを明にす。

大戯曲にして同時に大經典たるもの希臘のプラトーン以外に其匹儔を求むべからず、
自然を知らんとする者。人生を知らんとするもの、眞を知り美を知らんとする者は必ず一讀を惜むべからざる也。

法 學 士 安 岡 正 篤 著

王 陽 明 研 究

四六版總クロース
紙數二百八十頁
定價貳圓貳拾錢
郵 稅 十 錢

◎世界に冠たる東洋精神の誇

劍戟と迫害と自然との間から打成した力強い體驗の哲學と崇高な人格王陽明に
そは實に
東洋人の偉大なる誇である。本書は在來の漢學者の型を超越した潑刺たる新
人々が深刻なる情熱から、しかも嚴密なる學的精神を以て此の偉
人と其の哲學を説同時に東洋精神の新興を提唱せる名著であ
る。所謂陽明學に始めて
斬新なる哲學的體系を興へたことも、獨り支那學界のみならず一般
にも深い反省を促すものと謂はればならない。

佛國學士院
會員

ジキール・ミツシレー著 増富平藏譯 (再版)

結婚生活の心理と生理

原「愛」(ラムール)
四六版上製
四百二十頁
定價金貳圓四拾錢
郵税十錢

婦人の中に在る凡謎である妊娠の一事でとはニータエの言葉であるが、本書は此謎に對して一層の廣い深い判釋を與へたものであり、婦人に關する

佛獨の文學や、醫學的著述の中にも屢ば引用る、名著殊に著者

の深人に深甚の同情は、彼等をして嗚咽を禁ぜざらしむる眞摯は如何にも詩的であり、

未婚者は之に結婚生活が努力と探險との生活であり、既婚者は其の發見

と創造との生活であること
を學ぶべきである。

525
137

終

